

■ 旅客需要想定について

Q1：P4の通期業績予想において、国際国内それぞれの旅客需要の想定はどの程度か。

A1：現在の予約状況に基づいて需要見通しを想定した。国際旅客はこれまでとほぼ変わらずコロナ前の数%程度、国内旅客はコロナ前の20~30%程度と、極めて厳しい想定を置いている。

■ 手元流動性について

Q2：第4四半期のキャッシュバーンは月間250億円程度とのことだが、手元流動性に問題はないか。

A2：緊急事態宣言下で需要が低迷している第4四半期の想定キャッシュバーンが今後も続くと保守的に想定したうえで通常通り投資を行った場合でも、18か月分以上の手元流動性を確保できており、十分な水準であると考えている。

Q3：手元流動性の適正水準はどの程度か。

A3：未だかつてないパンデミックを踏まえたあるべき手元流動性の考え方については、中期経営計画における財務戦略の中でお示ししたい。

■ 貨物事業について

Q4：国際貨物が好調だが、これから先の単価の動向はどうか。キャパシティ拡大の余地はあるか。

A4：第3四半期における国際貨物の単価は前年比約2倍の水準となり、第4四半期も同水準を維持すると予想。また、旺盛な需要に対応すべく、他社貨物専用機をチャーターするなど、キャパシティの拡大にも努力していく。

■ 営業黒字化の前提について

Q5：営業利益黒字化の前提は。

A5：コロナ影響前対比国際旅客50%、国内旅客80%程度まで需要が回復すれば、EBIT黒字化は実現できると考えている。なお、固定費の削減をさらに進め、もう少し低い需要レベルでもEBIT黒字化を達成できるよう努力していきたい。

以上